

仕事に「これで十分」はない、 常によりよいものを目指す

根橋秀治さんは40年以上も東京染小紋の染色に携わり、その技術は高く評価され、現代の名工にも選ばれています。お話からは自分の仕事に対する揺るぎない矜持が伺われます。

● 染め師 根橋秀治さん

ねばし・ひでじ●東京都生まれ。代々染物を家業とする家に生まれる。父の仕事場を遊び場として少年時代を送り、高校卒業後、本格的に東京染小紋の染色に取り組む。1級染色技能士、東京マイスター、伝統工芸士の資格のほか、職業訓練指導員の免許を持つ。第54回全国小紋友禅染色競技会経済産業大臣賞のほか、多くの賞を受賞。平成21年度現代の名工に認定。(有)千和多染工代表取締役。



工程のほとんどすべてを一人で担う

——代々、染物を家業とされていたそうですね。

根橋 私で5代目になります。祖父の代まで長野で藍染を家業としており、半纏や布団皮などの染色を手がけていました。父が上京し、神田川沿いに工場を建て、東京染小紋の染色を始めたのです。私が生まれたのはその工場の建て前の日でした。父の仕事場が遊び場であり、小学校4年生の時には、跡を継いで染物の仕事をしようと考えていました。高校は色染化学科に進みましたが、染色の実際というよりも、染料を化学的な視点から学ぶことが中心でした。

——どのようにして染色の仕事を選んだのですか。

根橋 本格的に仕事を始めたのは、高校を卒業してからです。もちろん仕事の基本は父から教わりました。小さい時から父の働く姿を見て育ち、ある程度のことはわかっていましたので、自分で一人前になるように努めました。

——染色の世界で一人前になるには、どのくらいの期間が必要なのでしょう。

根橋 少なくとも10年程度はかかると言われています。私も10年くらいで一通りの仕事ができるようになり、20歳代の後半から30歳前後にかけて、たくさんのご注文をいただき、それを当

り前のようになしていました。

しかし、この仕事の深さを理解し、私自身が本当に満足できる仕事ができるようになったのは、30歳代の後半から40歳にかけてのころです。高校を卒業して本格的にこの仕事を始めてから20年が経っています。

——東京染小紋の染色工程を簡単に教えていただけますか。

根橋 普通、「しごき染め」と呼ばれる技法によって行います。専門の職人が模様を彫った型紙を受け取り、どんな色にするか考えます。色が決まったら、糯粉(もちこ)と米ぬかを混ぜて蒸し、練り合わせた元糊に染料を入れて色糊を作ります。このとき自分が考えた色にするため、慎重に調整します。

その後、絹でできた真っ白な生地を長さ7メートルあまりの板に貼り、その上に型紙を載せてへらを使って防



細心の注意を払いながら型付けを行う。長板の上に貼った生地に型紙を載せ、その上からへらで防染糊を置いていく。

染糊を置いていきます。こうして型紙の彫り抜かれた模様が生地に糊付けされ、色付けされる部分と区分けされるのです。この仕事を「型付け」と言います。その後、生地を板に貼ったまま糊を乾かす「板干し」へと移ります。そして地色の色糊をへらで色付けする「しごき」に取り掛かります。「しごき染め」の名前はここから来ています。さらに染料を生地に定着させるための「蒸し」と続きます。これらの作業が終わったら、糊や余分な染料を落とすために水洗いをして、乾燥させて仕上げとなります。

私はこの一連の作業を一人で行うようにしています。外注などで分業化すると、納得できるような色付けができない場合が多いからです。一通りのことはできているのですが、何かが足りない。われわれはそうした状態を「面

倒見が足りない」と言います。
 ― お仕事で最も注意されていらっしゃるのどのようなことですか。

根橋 型付けのときですね。生地は一反13メートルあまりの長さがあり、その全てにズレやムラがないように型付けを行います。型紙はズレないように、ちよつとよくいくらいに湿らして仕事にかかりますが、和紙でできているので乾きが早い。型紙の水分が少なくなるとズレが生じやすくなります。また型紙の乾きはその日の天気や湿度、温度にも左右されます。だから仕事をする部屋は、湿度など一定に保つようになっています。

着物の染色にこだわり、伝統に培われた技を生かしていきたい

― 喜びややりがいを感じられるのは



どのようなときでしょうか。

根橋 自分が染色した着物が、お召しになった方にピタッと合ったときですね。人によって合う着物はそれぞれです。そもそも着物は誰にでも合うというものではありません。着物の柄や色によって合う方が決まっていると言えるでしょう。まるで着物一枚一枚が、身につける方を選んでいくかのようです。それだけに、見事にその着物がお客様に合ったときは、本当にうれしくなるのです。

また、水洗いを終えて、糊や余分な染料が取れて、思い通りの色を出せたときもこの仕事をしていてよかったと思いますね。

― 厳しさや難しさはどのようなところにありますか。

根橋 この仕事はこれで十分だとい



染色の際に用いるへらと刷毛。型紙は手漉きの和紙を数枚貼り合わせたもので、模様が彫り抜かれている。

うことがありません。もっとよくしようと思ひ、手を加えるとかえって失敗してしまつということも少なくありません。振り返ってみるとよりよいものを求めては失敗するという繰り返しです。

「ほかにないものを作ってほしい」とよく言われますが、それが一番難しい。ほかにないものとはそんなに簡単にできるものではないということを、日々感じています。

― 従来の「しごき染め」だけでなく、様々な技法を行っていらっしゃるようです。

根橋 例えば「引き染め」です。この技法で染めると、生地裏まで染料が染みこむため、より深みのある色に仕上がります。「しごき染め」が糊をベースとした染料を使うのに対し、「引き染め」では水をベースとした染料を使います。また染色するとき「しごき染め」はへらを使いますが、「引き染め」は刷毛を使います。「引き染め」では、染める前の準備がとても重要です。なかでも、染料が生地にゆっくり染みこむために行つ「地入れ」と呼ばれる作業はとても大切です。布糊と大豆をすりつぶした液を刷毛で生地に引いていくのですが、これで仕上がり具合が左右されます。

ほかにもいろいろな技法を試みていますが、それもお客様の様々な要望に応えようと思つからです。いつも同じ

やり方をしていては、お客様の要望に応えることはできません。

― 近頃は着物以外にも携帯電話のケースなど伝統的な染色をほどこした様々な小物がありますが…

根橋 私も、そうした小物を手がけてはどうかと言われたことがあります。しかし、私は着物の染色にこだわりたいと思っています。着物の染色は昔から職人たちが技を磨き、培ってきた伝統工芸なので、それを絶やしたくないのです。

― 近年、若者の仕事に対する意識が希薄化していると指摘されています。なかなか仕事に就けなかったり、就職してもすぐに辞めてしまつという傾向があるようです。彼らへのアドバイスをお願いします。

根橋 いったん就いた仕事はまず続けることが大切ではないかと思ひます。はじめのうちは仕事のやりがいや喜びも見つけれず、厳しさに出会つて挫折してしまつこともあるでしょう。しかしそうした中でも歯を食いしばつて頑張り、仕事を続けて初めて見えてくるものがあります。それは仕事のやりがいであったり、深さであったり、あるいは苦しさや厳しさを乗り越える知恵です。これまでの自分を振り返つてみても、はじめのうちは何となく仕事をしていました。しかし、やがて仕事に対する自覚が生まれ、やりがいや喜びを感じるようになりました。